

立教英国学院通信

第二百六十四号 二〇一三年七月十三日
 発行者 立教英国学院

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
 GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikkyo.co.uk>

最後の一年

高三 穴澤 厚介

今までは、休み中は勉強があまりできなかった。自分への甘えがあったのだろうか。何か計画するはいいものの、それを実行に移すことができていなかったと思う。しかし、今回の長期休暇に入る前に、私はある

った時、ふーんと軽く思っていた。しかし、翌朝いざネクタイをしてみると、緊張を感じる事ができた。これをつければ自分は高三です。というのが外部からもはつきりわかってしまうし、何より自覚することによって改めて、責任感も感じる事ができた。そんな色々な意味で重い赤ネクタイをこれからずっとつけていく。

うという事も、今はそんな事は少しも感じない。つまり、自分で言うのには少し気が引けるが、心が広くなったと思う。そして何より、友人がいることに感謝しなくてはならないのかもしれない。今の私を作り上げてくれたのは、間違いなく周りの友人である。

今年から高校三年生。高校生活最後の年



入学始業礼拝



目標を立てていた。それは、集中力をつけることだった。今まで勉強をする時、私は集中力を維持することができずにいた。

休暇中、まず時間を決めて勉強をし、5分の休憩をとって、また勉強を繰り返した。その結果、確かに集中力はついたかもしれないがまだそれを何時間も持続させることは少し難しい。なので、今学期は集中力を維持することを目標とする。

そして、休暇が明けて学校に帰ると、赤ネクタイが待っていた。赤ネクタイをもら

今の私はまだ未熟者だ。社会の常識も、ルールも完全には分かっていない。しかし、この1年ちよつとの生活で確実に得たものが一つだけある。それは、「協調性」だ。この学校にいる以上、寮生活をしながらはならない。初めは不安や戸惑いがあったがこの一年で友人と一日を共に過ごすことによって、一つの共同社会での過ごし方がわかった。寮生活である以上、時には周りに合わせなくてはならない時がある。前までの自分だったら、不満を抱いていただろ

が始まった。これから自分がまだどれほど成長するのか。そして、この一年が終わった時、少しの後悔も残っていないような充実した高校生活を送っていきたい。もし終わった後、後悔がなければ、その時の自分は今の自分より一回りも二回りも成長しているだろう。



目次

	ページ
入学始業礼拝	1~4
球技大会	5
ハーフトーム	6~7
JAPANESE EVENING	8
春のミニ・アウトティング	9
EC 授業レポート	
ハリー・ポッターのふくろうがやってきた!	10
社会のフィールドワーク	
GRANLEIGH DISCOVERY	11
チャブレンより	12
着任・離任の先生方	12
計報	12

* コラム *

RIKKYO' s SAKURA	2
1 学期の行事	3
初めてのウィンブルドン	4
今年も漢字書き取りコンクール!	7



Z 旗

高一一 畑田 夏実

満開の桜を見る度に、ああ去年はもう散り尽くしたあのだった、と感慨が胸に押し寄せる。花が咲いているせいか、春、新学年の始まりを身にしみて感じるのはわたしだけだろうか。そしてそう考えるとき、わたしは常に一年という時間の長さで短さを思い知るのだ。

一年前のわたしは文字通り右も左もわからなくて、新しい生活におろおろするばかりであった。それから、思いきり笑ったり泣いたりして日々を過ごし、自分でも気が付かぬうちに大きく成長したことだろう。しかし、たくさんの新入生を前にして、一年前憧れた先輩になれているのかと自問すれば、その答えは否かもしれない。見えるところも見えないところも、この特殊な環境での一年分、大人になれているのだろうか。少なくとも、春休みが始まった頃は、一ヵ月後の自分が負うであろう義務や責任を、自覚していなかった。

春休みに、横須賀に保存されている古い戦艦を観に行った。世界三大記念艦の一つに数えられる「三笠」は、日本海海戦における大勝利をもたらした帝国海軍の、自慢の軍艦であった。約百年前、露国のバルチック艦隊を前にして、連合艦隊の旗艦である「三笠」は信号旗を掲げる。Z 旗とよばれるそれは、「皇國ノ興廃此の一戦ニアリ各員一層奮勵努力セヨ」という意味を持っていた。近代化の波に乗り、今まさにそこから振りおとされそうな極東の兵士たちの士気を、これほどまでに鼓舞した言葉があっただろうか。

この有名な信号文を改めて見たとき、わたしはこの言葉が、海軍の兵士たちのみならず、わたし自身にも向けられていることを悟った。

「皇國」はわたし自身、「各員」はわたしの心身すべての部分。そして「此の一戦」

は高校二年生として過ごす一年を指す。グローバルでシビアナな現代社会に足を踏み入れ、列強の仲間入りを果たした日本。わたしの将来は、この一年にかかっている。Z 旗に、そういわれた気がした。この信号文は、大学受験を視野に入れ、学校を引っ張って行く学年を迎えるわたしに、「一層奮勵努力」しろ、と喝を入れてくれているのだ。やがて大人になったときに厳しい世の中で生き



残るためには、今「此の一戦」を制せなければならぬ。組織の中心となつて学校を動かす、社会的責任も大きくなる高校二年生は、大人という名の列強の列の後方に、並んでいる。わたしはこの信号を見て、その義務や果たすべき役割を、はつきり自覚した。

先学期、高野チャプレンも繰り返し仰つた。人生を決めるのは学生時代の生き方だ

と。学生時代の努力や培った人間性が、その人を作るのだと。

満開の桜を背景に、今わたしの目の前には、Z 旗が掲げられている。

3 年後の自分

高一一 山田 紘毅

僕は3年後、自分の力だけで生きていく人になりたいと思っています。だから、立教英国学院に入学しました。

立教英国学院に来て3つの事に気づきました。

1 1つ目は、学校にいる全ての人がたくさんコミュニケーションをとることです。こんなに仲のいい人たちがいると知って驚きました。

2 2つ目は、すべての生徒と先生達が大きな家族、大家族として過ごしている事です。学校にいる全員が本当に仲が良く、絆の深い大家族なんだなと感じました。

最後に3つ目は、この学校には日本人以外の先生がたくさんいます。そして、さらにイギリスにある為、たくさんイギリス人とコミュニケーションをとっていくことができる事です。僕はこの環境を活かして英語の力を伸ばしていきたいと思いました。

自分の目標の為に大切なのは、もちろん3つ目も大切なのですが、1つ目と2つ目がこの中で一番大切だと思いました。なぜなら、自分の力だけで生きていくのに必ずいい友達が必要だからです。この学院には世界のあちこちから来ている人がいるので、大人になつてもお互いを助け、支え合うことが出来ます。

僕はこの学校のいろいろな良いところを活かし、自分が3年後、理想の自分になれるような努力をしていきたいと思っています。

す。

RIKKYO's SAKURA

2013年の今年、創立以来はじめて、
立教生が桜と共に始業入学礼拝を迎えました。



立教の桜は、ずいぶん昔のことですが、日本で用意された桜の木々150本を遠く英国まで空輸してもらったものです。植物を運ぶことは、検疫もあり、容易なことではありませんでした。まず植物の検疫に定評のあるオランダに一度送り、経由して英国に空輸されました。

けれども、日本とおなじような気候とはいえず、やや涼しい英国。桜の木の一部は根付かず、死んでしまいました。しかし多くはイギリスの土地に根を張り、今も30本近くの桜が毎春、元気に花を咲かせてくれます。

いつもは生徒が戻る前に散ってしまう桜ですが、例年より涼しかった今春は、入学始業礼拝を桜と共に迎え、それから1週間以上、花見を楽しむことができました。



決断

高一一 石上 直弥

僕にとつてのこの春休みを一言で表すのならば、それは「決断」だっただろう。

春休み中、いくつもの決断をしなければならなかった。それは、新年度を迎えるにあたって、自分はどのような高校生活を送りたいかを考えることであつたり、はたまた家庭の事情で転校することも考えたりだった。

まず始めに、昨年度三月に僕は立教英国学院中学部を卒業した。しかしこの学校は中高一貫の学校で、高校生の先輩方とも食事や生活を共にしていることもあり、関わりが深いのであまり他の中学校の卒業で起こる「離別」のような感情は起こらなかった。そして、どうせここに戻ってくる、などと思いながら帰宅した。その時の僕はまだ、この学校において中学部卒業と高等部入学の流れは、ただ、今まで通りそこにある「既存の道」

新生活・新学年を迎えて

を進むだけだと思っていた。

しかし帰宅してから何日かたったある日、父親にある話をされた。それは、日本への本帰国が決まった、ということだった。その話は僕に、今までにない感覚、を味あわせた。

僕は三年前からポーランドに父の仕事の都合で住んでいる。ポーランドに来て2年半はポーランドのアメリカンスクールに在学していて、去年の2学期から立教英国学院に転入した。その理由は、アメリカンスクールでは9月から学校が始まり6月で終わり、去年の6月で僕は学校を卒業したので、行く宛もなく、両親に知らされたこの学校に入学した。

今書いた通り、僕はこれまで、自分の歩む人生である「道」を人に流されて進んできたのである。そんな僕にとつて父親の話は僕を困惑させるものだった。その内容というのが、両親が日本に帰るにあたって、今の学校に残っていたいののか、それとも両親と共に日本に帰り、転校するのかを自分で決めるというものだったからだ。僕は深く考えた。そこで僕は初めて自分の人生にまっすぐに向き合った。

そして僕は、この立教英国学院に残ることを決めた。それと共にこれから3年間精一杯に頑張る覚悟をした。僕はアメリカンスクールに行っていたこともあり、多少は英語を話すことができる。しかし、このまま日本に帰ってしまうと自分が培ってきた英語力を無駄にしようと考えたのがこの学校に残ると決めた一番の理由だった。

この学校では週に4時間、「EC」(English Communication)という授業があり、その授業ではイギリス人の先生がネイティブの英語で授業をしてくれるというもので、日本の学校にはない、英

語力向上の大きなチャンスなのである。またこの学校は地域交流も盛んで本場の英語に触れる機会がたくさんあるのだ。ホームステイであつたり、対外試合であつたり、機会を作ろうと思えばいくらでもある。

確かに英語力の維持や向上も大きな理由だが、もうひとつ僕がこの学校に残ることを選んだ理由がある。僕は体を動かすことが好きで、放課後は基本、部活を過ごしている。しかし僕は飽きっぽい性格で、色々なスポーツをやってみたと思った。そこでこの学校の兼部制度に惹かれた。この学校では兼部が可能であり、部にはいくつ入っても良い。またそれぞれの体育会系の部活では他校との対外試合があるので色々な競技を楽しめる。

それらの大きな理由は僕をこの学校に留まらせるには十分過ぎた。そして学校に残ることを決めて、これから3年間の目標を立てた。その目標もこの学校ならではの、僕の英語力を活かせる良いチャンスだ。この学校では1学期に1度、英検などの

英語資格試験を受けることができる。また、2学期にはTOEICを全校で受験する。日本でも受けることはできるが、この学校では英語が生活に近いこともあり、そういった資格試験も身近に感じられる。3種類ある英語資格試験の中で僕が目標にしたのはTOEICだ。卒業までに800点から900点を目指してこれから勉強しようと思いいきり決めた。

そして4月14日、入学式を迎えた。この学校は何も変わっていない。ただのイギリスの片田舎にある学校だ。しかし僕は歩み始めようとしている自分に気付いた。元からある道は何も考えずに辿ろうとしていた自分に、「決断」は新しい道を作ってくれた。心を入れ替えて、自分が決めた人生をしっかりと歩む覚悟を決めた自分に、「成長したなあ。」なんてくだらないことを思いながら、また立教英国学院での生活に戻っていった。

【1学期の行事】

- | | |
|------------|---------------------------------------|
| 4月14日 | 入学始業礼拝 |
| 4月15日 | 身体測定、オリエンテーション |
| 4月16日 | 高等部実力テスト |
| 4月20日 | 委員会・クラブ活動紹介 |
| 4月27日 | 球技大会 |
| 5月5日 | TOEICの実施 |
| 5月9日 | テニス部対外試合 |
| 5月10日 | Japanese Evening |
| 5月12日 | 生徒会主催 Guildford Shopping |
| 5月13日 | ブルーベル見学 |
| 5月17日 | ロンドン・アウトイング |
| 5月18日 | バレーボール部対外試合 EPSOM CUP |
| 5月19日 | サッカー部 OB 戦 (home) |
| | ギター部コンサート |
| 5月25日～6月2日 | ハーフターム |
| 6月6日 | テニス部対外試合 |
| 6月8日 | 実用英語技能検定一次試験 (準1級、1級) |
| 6月9日 | 実用英語技能検定一次試験 (3級、2級) |
| | 第67回漢字書き取りコンクール |
| 6月12・15日 | ケンブリッジ英語検定の実施 |
| 6月25日～7月1日 | 期末考査 |
| 6月29日 | ウィンブルドン テニス観戦 |
| 7月4日 | スクールコンサート |
| 7月6日 | 終業礼拝、生徒帰宅 |
| 7月6～13日 | 夏期ホームステイ |
| 7月7～13日 | Wolverhampton Girl's High School 短期留学 |
| 7月8～12日 | 高等部3年 難関大受験者向け夏期補習 |

自立する為の春休みの準備

中二 塚田 泰成

よくよく考えてみると、もう中二である。この年齢になるといい加減自立しなければいけないと徐々に感じていた。そのため、春休みに自立できるように努力しようと思った。

春休み中に祖母の家に泊まる予定があったので、自立するために勉強の計画を自分で考えたり、また寮に戻る際に必要な物などを考えたり、自立できるようにするために頭を使い、いろいろ考えた。

また、自立できるようにするためには、自分自身の能力もあるが、心もいろいろ物事が降りかかってきても耐えられるようにしておかないといけないと感じ、いろいろなことを体験し、学ぶ、そして自分の心に余裕を持てるようにするということを意識して行った。

その結果、徐々に自分で成し遂げられることが増えてきて、目標へと一歩ずつ進んだが、それからが難しかった。それは自分で成し遂げられることが多くなったとしても、その成し遂げられることを自分から率先してやらないと自立へは結びつかないからである。

その自分から率先してやるということが完全にできるようになるには長い期間がかかると思う、自立すること以外にもう1つ目標を作った。それは毎日外に出ることだ。前の夏休みや冬休みでは家の中に1日中いることが多かったが、それはよくないと思うこの目標を立てた。

その目標を立ててから1日目、思い切っ外に出てみた。でも、何も変わった様子はなく、ただ普通の道をうろついて散歩して終わった。その時私は何か面白みを感じないと外に出ることなどただの苦痛だと感

じ2日目まで考えていた。でも全くいい考えが浮かばなかった。

そして2日目になりまた外に出た。面白みを見いだせなかったため同じことが再び起こると思ったが、とりあえず外に出て新しい発見をしようという決意で外に出た。すると、隣の家の車が新車になっていた、さすが走っていたり、昨日には発見できなかった新しい出来事が沢山おこっていて、遂に面白みを掴めた。それは、昨日と違う点を見つけることにあると感じた。

面白みを掴むと苦痛を感じることなく継続できた。

こうして春休みは終盤を迎え、この作文を書いているが、春休みで習得したものを十分に発揮し、新たなスタートを切りたい。さらに、チャレンジして駄目だった点を改善してうまく繋げていくことももっと良くなることも分かった。だから、成功を生み出すためには準備が必要である。



新入生の受付案内は高3が務めます。
昨年度高3の提案もあってよりスムーズに行われました。

2013 ウィンブルドン・テニス観戦 THE CHAMPIONSHIPS, WIMBLEDON

初めてのウィンブルドン

高2-2 伊藤 菜七子

テニスを愛する私にとって、立教英国学院で一番楽しみにしていたのは、今日行われたウィンブルドンだった。テニスプレイヤーにとっては聖地であり、TVの画面越しで見ると生で観るのでは全くと言っていいほど迫力が違った。

私が観戦したのは、イギリスの若手新鋭である女子テニスプレイヤー、ローラのシングルスだった。彼女は、ジュニアで入賞した経験を持ち、ミックスでも銀メダルを取ったことのある選手だ。最初のセットをローラは相手に大きな差を付けられて落としてしまった。ウィンブルドンの二番コートは芝で、よく滑るせいかな、ラリーがあまり続かなかった。若手の彼女にはプレッシャーもまだあったのだと思う。この前、初めてテニスの試合を経験した私は、彼女の気持が少しわかったような気がした。



しかし、二セット目。ローラは立ち直った。体が慣れてきたのかもしれないが、私は、彼女を一番立ち直らせたのは、彼女を応援していた観客の声援だったと思う。イギリスの新鋭であるローラは、コート中の観客の声援を受けていた。二セット目の途中から段々と顔に余裕が出てきて、最終セットで勝利したときには笑顔でガッツポーズをする姿を見せた。

スポーツにおいて、自分自身の力というものは勝利のためには何よりも一番の力である。しかし、それだけではない私は思う。それは、一緒に練習してきた仲間、指導して下さるコーチ、そして、その人を応援する周りの人々の力だ。そのことが、今日のウィンブルドンで一番学んだことだ。そして、もっとテニスが好きになったことが嬉しかった。

球技大会

「球技大会」

中三 今井 開斗

球技大会は、一年の中で一番最初の全校行事である。だから時差ボケでスポーツをするのとても辛かった。種目はバスケットボール。僕は団体競技が苦手で、特にバスケは苦手な一だった。でも中一、中二と頑張ってきたので挑戦してみた。休みはあまりなく、常にボールを持っていくか走っているか、それだけだった。平日は授業が終わると、着替えて練習、土日の午後は全部練習。苦しい僕にとっては、地獄だった。しかし、お互い声を掛け合ったり、教えてもらったりしていると、楽になれる。チームプレイで重要なのは助け合うこと。それがわかった。

ぼくは背が低く、力も弱いので、相手や味方と比べたら、ただの棒だ。遠くからシュートはできない、ディフェンスの時も相手にかわされる、役立たずの存在だ。でもこんな僕に合う良い作戦があった。ディフェンスの時に僕はボールをドリブルして襲ってくる敵をカバーし、仮にそれが僕をかわしてシュートしても、味方がカットしたり、リバウンドでとれば守れる。そこからが僕の重要な任務だ。味方がとった瞬間、

敵がいらないゴールに向かって走り、そして味方が僕に投げたボールをキャッチしてレイアップで決めるという作戦だ。こういう作戦だからって簡単にかわさせてあげてはいけないのでベストをつくさなければならなかった。

練習していくうちにシュートなどもだんだんうまくなっていたが、オフエンスのコツがどうしてもつかめなかった。それで先輩に怒られたりして練習に行きたくない思いが強くなっていった。でも、自分は今回の球技大会でシュートして点を決めてチームに貢献することが大きな目標だった。だからメロスのように勇気をふりしぼって毎日練習をした。勉強も忙しくて、スポーツで疲れて、精神的にも肉体的にも疲れてしまった自分は何より寝る時間が一番幸せだった。何にもしないで休めるのが一番自分を助けてくれると思った。

練習する時間がもう少し、球技大会前日、緊張と不安に包まれてすごく体が重かった。でも明日で終わると思うとやる気が起きた。

そして当日。自分にとっては運命の日であった。果たして今まで練習してきた成果を発揮できるか、勝てるか、心配だった。味方に迷惑をかけない、周りを見て判断して自分ができることを見つける、それを心に留めた。



球技大会に向けて、
生徒会・体育委員で上げる鯉のぼり

敵は普段とは違う雰囲気でも恐ろしかったので、相手をにらみつけながら、味方に声を掛けながら試合は進んでいった。すると、ちょうどゴール下にいた自分はゴールを見つめてボールが出るか入るか見ていた。出た瞬間、飛び上がりボールをキャッチし、ボードに書いてある四角の角をめがけて打つと、ボールは入った。そう、点を決めたのだ。そうすると、不安もふき飛び、チームに貢献できて、本当に嬉しかった。このようなことが三回あり、結果僕は六点決めることができた。ボールをカットしてレイアップで点を決めることはできなかったが、自分が目標にしていた事が達成できた。バスケットは男女両方とも全勝し、結果はエメラルドの優勝。二百点差の圧勝だった。その中に自分が決めたのも入っていると思うと、すごく嬉しかった。

球技大会をやり通した事で新入生との仲も深まり、今回は最高な球技大会だったと思う。一生残る思い出、立教にいて忘れられない思い出が作れて良かった。これから様々な学校行事に積極的に参加しようと思う。

球技大会

高二 久保田 涼介

グキッ。僕の肘が悲鳴をあげた。しかしここでピッチを出れば先輩が黙ってはいないだろうと思えば最後の力を振り絞り再び、ピッチにたった。

僕は今回の球技大会の種目はバレーボールを選択した。去年はバスケットボールを選択し足を痛めたから今年は安全にスポーツをしたいなと思っていた。だがどうだろう。種目の紙が発表され僕の名前はバレーボールの所ではなくサッカーのところにあったのだ。その時は5秒ほど静止していたと思う。サッカーなんて中学のころの昼休みに少しやっていくくらいでほとんど初



めてだ。サッカーは荒いし何より怪我が多いスポーツだ。僕はこれからの二週間がとても不安になった。

練習が始まり三日がたったころ、今までキーパーをつとめていた人がやりたくないと言ってきた。そしたらもちろん先輩たちは怒るしチームの人たちもいやな雰囲気になっていた。もともとベンチ宣言されていた僕はこれはチャンスだと思い自分で自らキーパーを受け入れた。これが地獄への第一歩だった。

この日から僕は徹底的にキーパーの方法を教わった。先輩の一人がキーパーを十二年やってきたこともあって練習はつらかった。試合前日には体が青アザだらけだった。試合当日、芝生の上でにぎやかに談笑している相手チームと反対に僕たちのチームはとても静かで緊張していた。

同点は負けと一緒。一時間にもおよぶ最後のミーティングでこの言葉を最後に僕はピッチに立った。ウォーミングアップで先輩が蹴ったボールが手に当たり、肘に激痛が走った。しかしいままでがんばってきた二週間を思い返し踏ん張った。試合の結果は2対2で同点。

相手チームはさっさと帰る中、僕たちはそれから一時間はピッチで黙り込んでいた。サッカーはやりたくなかったけれど今ではサッカーでよかったなと思う。こんなに熱くなったのは久々だった。来年もサッカーにしようかな。

ハーフターム



ハーフターム

高一一 沼澤 芽生

私はラジウィックにある家庭でホームステイをした。私にとって三回目のホームステイだ。しかし今までのホームステイは二回とも、同じ年代の子供がいる家に行って、その子の学校と一緒に通うというものだった。だからすることが決まっていらない、自由なホームステイだった今回は、今までとは全く違った。

まず学んだことは、声の大きさだ。私の行った家庭は、子供はもう結婚していて、夫婦二人暮らしだった。会話をするとき私にとっての普通の音量で話すと、よく耳を

傾けられてしまう。また、逆に意識して大きく話すと、うれしそうに聞いてくれた。そうして気づいたことは、外国の方にとって私達は反応が薄いと思われるが、さうして私達は反応が薄いと思われがちだということだ。だから大きな声ではつきりと反応することが大切だと思つた。また、首を縦や横にふって自分の意志を示すのではなく、Yes、Noと言葉にすることが、小さいけれど大事だと知った。これはホストファミリーから、

「首じゃなくて、言葉にして。」と言われ、知ったことだ。他にも相づちを意識して頻繁に、大げさにすると話が弾むと気付いた。これからも外国の方と話をするときは、大きな声で、はっきりとオーバーリアクションで話そうと思う。

私がホームステイした家は、とてもゆったりしていた。庭には多くの植物があり、自分達で育てた野菜やハーブを料理に使うそう。天気が良いと、庭で読書をしたり、紅茶を飲んだり、とにかく良く庭でリラックスしていた。私から見てホストファミリーは毎日笑っていて、とても楽しそうだった。たまに、忙しそうで、いつも疲れているような人を見かけるが、まさに正反対だ。私もホストファミリーの様に、力を抜いて、上手く生活できるようにになりたい。

日本では、時間に追われてせかせか暮らしている人が多いと思う。また外国に比べて、家ではよくテレビがついていて、家族との会話が少なくなりがちだ。食事の時間も、二十分弱など短い家が多いのではないだろうか。一週間ホームステイをしてみて、家族と沢山話したり、ゆったり食事をとったりする生活はいいなと思った。家で真似しようと思う。リラックスできたハーフタームだった。

家族の温かさ

高一一

三村 美優

立教生となって家を離れ、約1カ月が経ち、初めてのハーフタームを迎えた。たった一週間の短い休みだったが、とても大切なものを気づかせてくれた時間だった。それは「家族の温かさ」だ。

よく「離れて気づくものがある。」と言う。この言葉が、今では以前の何倍にも感じる。前までいかに家族が大切か、ということとは理解していた。しかし立教生になって初めて親元を離れ、家族を離れ生活し、実感した。私はなんて恵まれているのだろう、と。家から時間をかけて笑顔で私を迎



ステイ先でつくった
オムライス

えに来てくれ、車中では「今日は何を食べたい?」と聞いてくれる。家に着いたら家族全員が「おかえり」と迎え入れてくれる。私の部屋も私が立教に在る間に母が掃除をしてくれていて、すぐに使い慣れたベッドで休むことができた。夕食には私の好物がテーブルに並び、立教へ入学する前と後で家族は変わっていない。しかし毎日家族が私にしてくれることひとつひとつが温かく、大切なものに感じる。立教へ来る前はそれらの全てがあたりまえで、いつも必ずそばにあるものだった。毎日朝早く母が起きて愛情を込めて作ってくれたあのお弁当をな

ぜ残してしまつたのだろう。時間はあつたはずなのに、どうしてもつと家の手伝いをしなかったのだろう。後悔を挙げればきりが無い。そんなことに気づけたのも初めて家を、家族を離れたからだと思う。そこで、今私がすべきことは何だろう。早いもので高一の一学期も後半に入ってしまった。ということは、ついに学期末テストが行われる。今まで学んだ事を十分に復習し、満足な結果を得て私のがんばりを家族に伝えたい。そしてこれからも家族に感謝し、一日一日を過ごしていきたい。

ホームステイ Q & A

Q1 立教生はどれくらいホームステイをするの?

A. 今年のハーフタームは、約100名の生徒が英国人家庭にホームステイをしました。これは全校の3分の2にあたります。

Q2 どんな家庭にステイするの?

A. ロンドンといった都市ではなく、カントリーサイドの穏やかな環境の家庭がホストファミリーになります。中学生以下の場合、イギリスの様々なところへ連れ出してくれる家庭が場あつたように配慮しています。農場だったり、小さいお子さんがいたり、広い庭とテニスコートがあつたりと、家庭環境はそれぞれ。ステイ先のお子さんと仲良くなつたり、スポーツに汗を流したり、外出したりして、交流とイギリスの生活を体験します。

From the Host Family...

During the half-term period we had three students stay with us: Mitsutaka, Dan and Genki. We are writing to say how much we enjoyed their company in our home.

All three students showed themselves to be friendly, respectful and to have a great sense of humor. They were helpful and kind and joined in when asked.

These boys are a credit to your school and their families. We wish them every success for the future.

Best regards



Thank you very much for having us!

I wanted to write and say that our first homestay experience has been a wonderful one. We hosted Rina, Mana and Aiko who were an absolute delight and a credit to the school and themselves. If you can please pass this onto their teachers it would be much appreciated. If we ever have the opportunity to host any of these girls again we would be very happy!

Many thanks

"It was with great pleasure that I hosted four of your students, Daisuke, Wataru, Atsushi and Yo last week. They always tried hard to practice their English at meal times, and we had some good conversations over supper. They told us that they had a good week, with local outings to Horsham and Guildford, a shopping trip to London, and playing with Kipper our dog. Paul and I wish them all well!"

"Both Haruhi and Marika were an absolute delight and would be welcome to come and stay with us at any time".

"The three girls got on well with each other and with my children. At mealtimes together they spoke English and were well-mannered. They ate all the meals I cooked, watched movies with my boys and did a jigsaw puzzle together. They were a pleasure to have in the house".



See you soon!

今年も漢字書き取りコンクール！

6月9日（日）、毎年恒例の漢字書き取りコンクールが今年も行われました。小学校5年生から高校3年生まで、全校生徒で漢字の書き取り100問にチャレンジします。もちろん、先生たちも生徒たちとともに取り組みます。「先生に勝つぞ!」と、毎年意気込み、盛り上がります。

100問ですが、そう容易に満点がとれないのが、立教漢字コンクール。まず、とめとハネまで正確さを求められるから。またウルトラCと呼ばれる超難問が8問出題されるのです。この問題ゆえに、立教の漢字コンクールを覚えている卒業生も多いのではないのでしょうか。今回のテーマは「空想上の生き物」。この問題に何が出るかを予想するのも生徒の楽しみです。

「天使や妖精も出るのかな？」

ハーフタームが明けてからわずか1週間。

「先生、漢字の過去問題5年分ください!」

「ここは、はねですか、とめですか」

などと言って、意欲的に教員室にやってくる生徒も少なくありませんでした。コンクール開催は夜だったので、いつもはゆっくりしている日曜の午後、漢字の勉強を一生懸命している生徒の姿が見られました。どんな行事にも積極的に取り組むのが、立教生のいいところですね。

立教漢字コンクール 問題に挑戦!

7	6	5	4	3	2	1
妖怪ろくろ首	ほうおうがつばさを広げる	えんまのようなおそろしい顔	人口がていげんする	損害をこうむる	じんとうで指揮する	にしびがさす部屋

こたえは9ページに。

新学年が始まり、沢山の新生が入学し、最初の大イベント「球技大会」が終わると、息つく暇もなく次の行事「Japanese Evening」の準備が始まりました。ただでさえ忙しい立教生ですが、今年は生徒会と地域交流委員会を中心にかなり計画的に準備が進んでいたようです。



球技大会前後から「新しい企画はありませんか？」と生徒会役員から全校生徒に呼びかけが始まりました。今年の生徒会長は「短期交換留学」経験者だけあって、現地校との交流にも意欲的です。英語堪能な地域交流委員長も委員のメンバーをよく集めて周到に準備をすめました。その甲斐あって、当日は沢山の学生が本校を訪れてくれました。短期交換留学の相手校ミレスクールの子供たちはもちろん、地元の小中学校など数校から大勢の生徒たちが集まりました。地元のお年を召した方々や家族連れも目立ちました。ステイ先のホストファミリーやE.C.の授業で訪れたシニアコミュニティの方々など顔なじみの人たちも沢山いらっしやっていたようです。

数年前に比べて生徒の数もずっと増え、経験を重ねた分ホスト役としての余裕も出てきたこともあり、今年は例年とは少し形式を変えました。



Japanese Evening



皆さんが集まるとまず大ホールのスクリーンを使ったプレゼンテーションを行い「日本」を紹介。「駄菓子」「札幌雪祭り」「日欧花火比較」「温泉」など話題も多岐にわたり、中には日本が誇る最新の「トイレ」の話や日本独自の「バレンタインデー」についてなどオリジナリティに富む発表もありました。

これが終了すると、お客さん達を各会場にご案内。メイン会場では恒例の「コマ」「あやとり」「箸」「書道」「折り紙」「剣玉」など実際に「体験」してもらいながら日本古来の遊びや伝統を紹介しました。これに加えて去年から始まった「福笑い」など新しい企画でも皆さんに楽しんでもらえたようです。別会場では「剣道」のデモンストレーションや「日本語」教室、そしてイギリスに3カ所にしかないと言われる本格的な茶室での茶道体験コーナーも盛況でした。

8年前に始まったこのJapanese Evening。「日本文化の紹介」という本来の目的はそのままに、いつの間にか生徒たちの間でも自然にうけいられるようになり、今では「イギリス人との交流の機会」という感覚でより意欲的に取り組む生徒たちが増えてきました。不思議なもので、そういう生徒たちの気持ちが伝わるのか、イギリス人の方々もより積極的に参加して下さるようになり、会場をあちこちと回りながら存分に「日本のタベ」を満喫して下さいたいようです。

終了間際になっても剣玉をやり続ける小学生、折り紙の説明に真剣に聞き入るシニアの方たち… 今年のJapanese Eveningも大成功でした。

レディ・ジェイン・グレイについて

小五 吉岡 美緒

九日女王と呼ばれる、レディ・ジェイン・グレイという人を知っていますか。このレディ・ジェイン・グレイと呼ばれる人物は、十七才で王位を授けられました。ところで、その『九日女王』を今から説明します。

レディ・ジェイン・グレイは十六世紀のイギリス女性で日本ではほとんど知られていません。その名の通り在位は九日間でした。この女性は、ギリシャ語がたんのうで、イギリスきつての美少女だったそうです。その美しさはエリザベスと張り合うほどだったようです。政略結婚で結婚したため、十六歳での結婚でした。しかし義父ノーサンバランド公爵は政敵を処刑し、強引に嫁を取り立て女王にしまいました。しかし目的は、女王を傀儡にして政治をわが物にし、息子ギルフォードを国王にすることでした。重要ポストは、ノーサンバランド家で固めたかったのです。

ロンドン塔へ行った後、ナショナルギャラリーに行くと、ジェイン・グレイの処刑される絵を見ました。ジェインの、

「信仰を捨ててまで、生きる気はない」というのが印象的でした。なぜなら、ジェインみたいな生きたくても、死ななければいけない運命の人も世の中には多くいるからです。その時、私は生きていることのすばらしさを学びました。そこで買った本は、一生の宝物です。

私は、ロンドン塔に行くと、初めてジェイン・グレイを知りましたが、生きられるのに、信仰を捨ててまで生きる気はない」と言っていたジェイン・グレイはすごい人だと思います。私もそんな立派な人になりたいです。

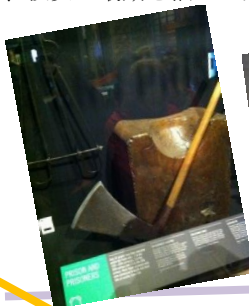
春のミニ・アウトティング



今年も5月にロンドンへミニ・アウトティングで外出しました。

高1ではすっかり定例となった、世界史の先生による、ギリシャやローマの学習が大英博物館で行われました。学んだばかりの古代歴史を彫刻や遺物で見えて知る学習です。

高2は、みな膝がわらってしまうほどに、セントポール大聖堂の長い長い階段を登り、鐘楼からのすばらしい眺めを堪能。小5から中3はテムズ川の遊覧船に乗り、ロンドン橋やセントポール大聖堂などを観光し、ロンドン塔でジェイン・グレイゆかりの場所を見学したのち、ナショナル・ギャラリーへまわって、彼女の最期を描いた大きな絵画を鑑賞しました。



処刑された人たち

小六 大石 桜子

入った瞬間に建物に囲まれた塔、ロンドン塔は私にとって、とても印象に残った場所でした。その中で私が気になった人物はレディ・ジェイン・グレイです。彼女は九日間だけイギリスの女王でした。なので、彼女は日本や他の国ではあまり知られていません。

レディ・ジェイン・グレイはとても偉い女の人で、彼女は十六歳で政略結婚させられ十七歳で殺されたという聞いて、私は何も罪をおかしていないのに、とても彼女はかわいそうと思いました。彼女はメアリー女王にカトリックに改宗するなら命は助けようと言われたらしいのですが、彼女は、信仰を捨ててまで生きる気はないと言ったのです。

私は、レディ・ジェイン・グレイはとても立派だと思いました。なぜなら自分の決めた事は中途半端にしないですごくいい事だからです。

ロンドン塔で処刑された人たちの中にもう一人ジェイン・グレイのように濡れ衣を着せられた人物がいました。彼女の名前は、アン・ブーリンという女王でした。アンに着せられた罪は濡れ衣であつたので、アン・ブーリンの亡霊が出るかとされているそうです。私は何も罪をおかしていない人に罪を着せて処刑するというやり方にはおどろきました。

私はイギリスといったら、ビッグ・ベンというイメージがあつたので、初めてロンドン塔の事を知ってこんな建物があつたのだなと思いました。ロンドン塔は私にとっても印象的な場所でした。

漢字コンクールの解答

1. 西日
2. 陣頭
3. 被る
4. 遙減
5. 閻魔
6. 鳳凰
7. 轆轤

EC (英会話) 授業レポート

久しぶりの晴天。昨晩の雨がキャンパスの芝生をしっとりとし、落ち着かせていた。遠くから生徒達の楽しそうな声。芝生の上には何やら見慣れぬ生き物が…。子犬よりも大きな生き物がすくっと立って大きな目でこちらを見つめていた。イーグルオウル「あまり近くに寄り過ぎてはダメよ。」

ECのイギリス人の先生がフクロウの周りに集まった生徒達に穏やかに呼びかける。



「大きい！翼を広げたらどのくらいかなあ？」
「OWL MANに聞いて御覧なさい…」
先生に促されるとそれほどためらわずに元気に聞いた。

「そうだね、こうして見てるだけでも大きいけど、翼を広げると1.5メートルはあるんだ。」

一見寡黙な雰囲気のおじさんだったが生徒達の質問にはゆっくりと温かい目で答えてくれた。



このEC (English Communication) の授業に招かれたMr. Kenwardは地元に住むフクロウ使い。近隣の学校や施設に行つてフクロウたちを子供達に紹介している。今回はECのシャープ先生のアイデアでフクロウ達を立教に連れて来てもらった。事前の準備もたつぷりした。フクロウについて英語でいろいろな情報を集めて皆でディスカッションをしたり、フクロウ使いのおじさんにする質問もたくさん用意した。英語を習い始めて数カ月の小学校5年生もノートにしっかりと質問を書き留めていた。
“How old are the owl’s?”

「このフクロウは52才。フクロウは随分長生きなんだよ。」

「向こうにいる白いフクロウが見えるかい？あれがハリー・ポッターに出てくるのと同じ種類だよ。それからほら、そのバスケットの中を覗いてごらん。」

芝生の上に出ているフクロウは大小合わせて5羽ほどいたが、もう一羽、芝の片隅にチヨコンとおいてあるバスケットの中にもフクロウがいた。

「かわいいー!!!」



女子生徒達が大騒ぎ。バスケットの中に入るのは毛むくじやらのフクロウの赤ちゃん。他のフクロウとはいささか違って見えたが、ギョロリとした大きな目だけは同じだった。



「んー、それはちょっと難しい質問だな。」

芝の向こうではMr. Kenwardが今度は高校生のグループに囲まれて質問を受けていた。高校生になると質問の内容もずっと高度だ。Mr. Kenwardは1時間目の授業から昼食直前の4時間目まで、代わる代わるやって来る生徒達の質問に一生懸命答えてくれた。おまけにフクロウ達を生徒達の腕に乗せてくれるサービスも。厚手のカバーを腕に巻いて準備が出来る時、Mr. Kenwardがゆっくりとフクロウを乗せてくれた。英語の質問をする時よりもずっと緊張した面持ちで腕を差し出す女子生徒。でもいったんその腕にフクロウが乗ると嬉しそうに友達に写真を撮ってもらっていた。

“Can I touch him?”

“Of course, but gently...”



大満足の生徒達。そして4時間も付き合ってくれたMr. Kenwardも立教の生徒達のことを大いに気に入ってくれたらしい。「いろんな学校をまわっている人だけど、立

ハリー・ポッターのフクロウがやってきた!



教の生徒達はとっても礼儀正しくいい子達だって言っていたわ。今度あの赤ちゃんフクロウが大きくなったらまた見せに来てくれるって!」

雨上がりの快晴が良かったのか、生徒達の準備が良かったのか、はたまたMr. Kenwardの穏やかな人柄のおかげか、この企画の責任者、シャープ先生は満面の笑顔で嬉しそうに続けた。

「いいアイデアがあるの。今度は蛇使いつてどう?ほら、こうやって首の周りに乗せてくれるの…本気よ。目星はついているから…」

ECの授業がまた面白くなりそうだ。

PEDESTRIANS の意味は何だと思う？
...歩く人？

物から想像して英語学習



信号機が青になっている時間
が日本より短い

Boots というやっきょくが、それぞれ
そのお店によって売っているものが違う



一つの村に、同じ店名の薬局で、処方箋専門のもの、眼科と併設されたもの、一般的な薬局、と三種類あることも、発見しました。

自動販売機がない！



お店のほうが
便利だからなのでは？



チャリティーショップが多いというの
も、イギリスの特徴。どのような村に行
っても必ず軒はチャリティーショップ
がある様子。



Oxfam というお店では、同じ店名にもかかわらず、
本だけ、チャリティーショップ、などと
区別がなされていておもしろかったです。

社会のフィールドワーク 小5～中1編

Cranleigh Discovery

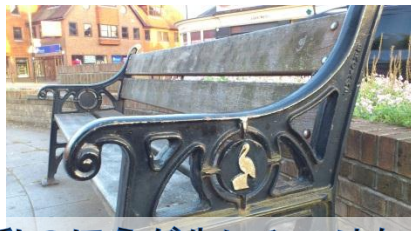
克蘭レー村の探索

シンボルマークがいたるところにあった！

特に面白がっていたのは、村のシンボルのツル探しです。克蘭レー
の村では、かつてツルを捕獲して王様へ献上していたようで、村のあ
ちらこちに、このシンボルが描かれているのです。



こっちの上にも
あるよ！



私のほうが先にみつけたよ！



あそこ！



はじめて英語で注文

チャプレンより「挨拶」



司祭 林 和広

4月より高野チャプレンの後任として日本聖公会神戸教区から派遣され、チャプレンとして着任してから最初の学期を終えました。昨秋に立教英国学院への派遣要請を受けた時は驚きと同時に、自分のような若僧がその務めを果たすことができるのだろうかという不安を感じました。また、海外生活の経験の無い妻と3歳と1歳の小さな子供を連れての渡英にも不安を抱いておりました。しかし、新しい生活に戸惑いながらも、生徒たちと教員の方々とのおつきあいを通して、刺激を受けながら過ごすことができております。今回、初めて学院通信の原稿を書かせて頂いておりますが、まずは自己紹介からさせていただきます。私は1974年、山口県の下関市の生まれです。英国へは今回で3度目になります。初めて英国を訪れたのは高校三年の秋です。ボーンマスでのホームステイ及び語学学校での学びをするためでした。その後、大学に進学、卒業後、企業に入社して7年目を迎えた時、聖職志願することを決意して勤めていた会社を退社、京都の神

学館で三年間、神学を学びました。神学館を卒業後、聖職（執事）に按手された年に聖公会の発祥地である英国の神学校で神学を学ぶ機会を頂き、ウェストヨークシャー州にある神学校に留学しました。本学院は全寮制の学校であります。私自身、8歳の時に始めたテニスに本格的に取り組み、親元を離れて中学2年から高校3年生までの5年間、寮生活をしました。親元を離れて寮生活をしている生徒たちの姿を見ますと自分の昔の頃を思い出します。又、私が学んだ京都と英国の神学校は寮生活を義務づけていたもので、成人となつて再び寮生活をする機会を得ました。寮生活は多様な人間同士が共同で生活していくことの楽しさと難しさの両面を教えてくれました。

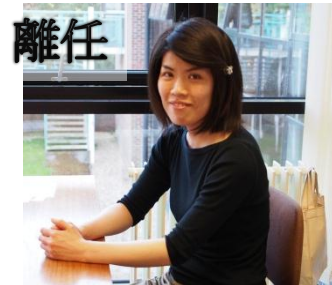
これまでの学びの中で最も大切な事として教えられたことは「めげない、諦めない」ことです。常に周りに耳を傾け、自分の頭で考え、学び続ける姿勢を持つことを教えられました。たとえ困難が続こうとも、自分の思い描いたようにならなくとも、諦めずに生きていけば必ず新たな道が開かれるのだと何度も励まされてきました。きわめてシンプルなことですが、この精神が苦しい時の自分を奮立たせてくれました。

暗い出来事・問題が後を断たず、先行きが見えない現代社会の中で、社会に出る準備をしている生徒たちに必要な事は、勉強だけでなく、「常に諦めず、前を向いて、歩く」という強い心を養うことだと思ひます。一人ひとりがかけがえのない存在であり、一人ひとりが社会に役立つ存在となるように召されていることを祈りと共に伝え続けたいと思ひます。

着任の先生方



4月に4名の先生方が着任されました。磯田彩先生（養護教諭）、黒沢孝美先生（社会）、齊藤亜沙子先生（保健体育）、杉本麻由香先生（国語）です。共に学びを深め、良き時間を過ごされますように。



離任

7月で、養護教諭として生徒達を常にあたたく見守って下さいました丹沢美樹先生が離任されます。今までどうもありがとうございました。

・・・ 訃報 ・・・

本校に16年お勤めになられた幸田政隆先生（数学）が、4月5日に永眠されました。4月26日に、地元クランレー村のセント・ニコラス教会にて葬儀が執り行われました。また本校で9年間バイオリンをご教授くださいました、MR DERYCK WAREING が4月19日にご逝去されました。お二人の上に、主の祝福と安らかな眠りがありますように。どうぞ皆様もお祈りして下さい。

立教英国学院通信の
電子配信への切り替えに
ご協力下さい。

ご意見、ご感想もこちらへどうぞ。

infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk